



headline-7 THE DRESDEN DOLLS

絶望も希望も、まとめてポップに爆発させるザ・ドレスデン・ドールズ新作完成

昨年には、ナイン・インチ・ネイルズのワールド・ツアー前半戦でサポート・アクトに大抜擢、自主制作したファースト・アルバムが日本でもリリースされ、初来日となったフジ・ロック05では素晴らしいパフォーマンスを見せつけて、一躍その名を知らしめたドレスデン・ドールズ。ヴォーカル&ピアノのアマンダ・パーマーとドラムスのブライアン・ヴィグリオーネからなる、この魅力的なデュオが、いよいよ実質的なメジャー・デビュー作となる「イエス・ヴァージニア」を完成させた。／「イエス・ヴァージニア」という言葉は、収録曲のひとつ「ミセス0」の歌詞中に出てくるフレーズだが、元々の出典は、ヴァージニアという名の少女から新聞社宛に投書された「サンタクロースって本当にいるの?」という質問への回答からきているものさうだ。少女に「目に見えないものを信じる力の大切さ」を説く記者の文章は、アメリカでは本当にあった感動譚としてよく知られており、このタイトルを聞けば誰でも思い浮かべることができるような象徴的な響きを得ているのだという。実際には「ミセス0」というナンバー自体は、「ノー・ヒットラー、ノー・ホロコースト……」と、歴史上の陰惨な出来事を記憶から消し去ろうとする人間について歌ったものだが、そこに対照的に配置された言葉がアルバム全体の題名へとピックアップするセンスに、彼女たちの表現の本質がよく表されている。ドレスデン・ドールズの音楽は、底知れぬほど深い闇を扱いつつも、必ず同時に光を感じさせてくれるものになっているのだ。／最新作のプロデューサーは、ショーン・スレイドとポール・コルダリー。これまでレディオヘッドやホールなどを手がけてきた実力派チームだが、特にショーンは昨夏のフジに同行していたほどの入れ込みようで、そんなバックアップ態勢十分の制作環境で行なわれたレコーディングは、ライブ・パフォーマンスを第一の身上とするドレスデン・ドールズの魅力を前作以上にうまくスタジオ作品として定着させるのに成功している。ピアノとドラムスだけ、という限定された楽器編成から、驚くほど多彩なエモーションを溢れ出させる彼女たちの才能は、ここに全面開花したと云っていい。／実はホワイト・ストライプスと同時期にプロモ来日していた彼女たちに新作についてじっくりと語ってもらったインタビューは次号に掲載予定なので、今号の付録CDに収められた“シング”を聴きながら、その超チャームなキャラクターが炸裂した写真とともに楽しみに待っていてほしい。 鈴木喜之